高度経済成長期における都市祭礼の衰退と復活

Degeneration and Revival of City Festivals in the Rapid Economic Growth Period

阿南　透

ANAMI Toru

❶問題の所在
❷青森ねぶた祭
❸野田七夕まつり
❹となみ夜高まつり
結論

［論文要旨］

本稿は，高度成長期における都市祭礼の変化を，地域社会との関係に注目しながら比較し，変化の特徴を明らかにするものである。具体的には，青森ねぶた祭（青森県青森市），野田七夕まつり（千葉県野田市），となみ夜高まつり（富山県砺波市）を例とする。青森ねぶた祭では，1960 年代に地域ねぶたが減少するが，1970 年代には公共団体や全国企業が加わって台数が増加し，観光化が進んだ。そして各地への遠征や文化財指定へとつながった。野田七夕まつりなどの都市部の七夕まつりは，1951 ～ 1955 年に各地の商店街に普及するが，1965 ～ 1970 年頃に中止が目立った。野田でも 1972 年にパレードを導入し，市民祭に近づけることで存続を図った。となみ夜高まつりなど富山県の「喧嘩祭」は，1960 年頃に警察や PTA などから批判されて中断し，60 年代後半に復活した。

このように，高度成長期前期には，どの祭礼にも衰退や中断，重要な変更がみられた。一方，後期には，祭礼が復興し発展したことが明らかになった。変化の要因として，前期の衰退には，経済効率第一の風潮のほか，新生活運動も関与していた可能性がある。後期の復興には，石油ショック以後の安定成長期の「文化の時代」に，祭礼が文化として扱われ，文化財指定を受ける「文化化」，祭礼が観光資源になる「観光化」，行政などが予算を立案し，業務として運営する「組織化」，さらに事故のない祭礼を目指す「健全化」などの特徴が見られる。

【キーワード】高度成長，祭礼の衰退と復活，祭礼の文化化

❶……問題の所在

本稿は，高度成長期における都市祭礼の変化を，地域社会との関係に注目しながら比較し，変化の特徴を明らかにするものである。

民俗学における都市祭礼研究は，人々の関係に重点を置く人類学や社会学寄りの研究と，信仰と祭具の起源と変遷に重点を置く歴史学寄りの研究に大別できる。いずれも個別の祭礼と当該地域社会との関係に注目し，事例研究を蓄積してきた。このように個別の祭礼についての報告が増加した今，次は複数の祭礼を比較する段階に達していると考えられる。

そこで本稿は，筆者がこれまでに研究して来た祭礼を比較し，高度成長期の変化の特徴を明らかにする。これらの地域では，高度成長期の前半（おおむね1960年代前半）に，祭礼の中断や衰退，内容変更を経験する。しかし後半（1960年代後半）には復活し，発展を遂げていく。こうした衰退と復活はなぜ起こったのであろうか。

今回取り上げる祭礼は3つある。1つ目の「青森ねぶた祭」（青森県青森市）は，高度成長期に観光化し，大きく成長した反面，参加団体が入れ替わり，地縁集団から企業や公益団体へと変化した。また1980年に国の重要無形民俗文化財の指定を受けている。2つ目の「野田七夕まつり」（千葉県野田市）は，高度成長期前半に全国的に流行した七夕祭りと同様の祭礼であるが，後半に入ると他の多くの七夕祭りが衰退したにもかかわらず，現在も存続している祭礼である。パレードを取り入れて市民祭の形態に近づいたことが存続につながったと考えられる。3つ目の「となみ夜高まつり」（富山県砺波市）は，1960年代に一度中断したものの復活し，発展している祭礼である。

3つの祭礼自体には共通点がほとんど見られないが，衰退と復活という点では共通点がある。3つの祭礼を比較し，他地域の祭礼を研究する際の指標を抽出するのが今回の課題である。

❷……青森ねぶた祭

（1）概要

青森ねぶた祭は，青森県青森市で8月2～7日に開催される祭礼である[(1)]（写真1）。ねぶたと呼ばれる燈籠を載せた山車が数多く（現在は22台）目抜き通りを巡行する。起源は諸説あるが，民俗学では，睡魔などを祓い流す「眠り流し」とするのが通説である。特定社寺の行事ではない。青森市だけでなく，青森県から秋田県にかけて類似行事が分布する。

現在の青森ねぶた祭の特徴は次のとおりである。まず，ねぶたは，針金の枠に紙を貼って中から電球で照らす，人形の形をした燈籠である。人形1～3体を組み合わせて1つのねぶたが構成される。大きさは幅9m，奥行き7m，高さ5m以内に制限されている。ねぶたの題材に決まりはないが，日本や中国の歴史伝説に取材したものが多い。「ねぶた師」と呼ばれる専門家が毎年作り，祭礼が終わると廃棄される1年限りの作品である。ねぶたは二輪の台車に載せて運行するため，細かな動きが可能である。ねぶたを運行する団体は，現在では企業と公共団体が中心である。しかし参

加団体に制約はなく，新規参入や撤退も頻繁で，年により台数が変動する。ねぶた本体（燈籠）には，ねぶた囃子を奏でる囃子方とハネトが一緒に運行する。ハネトとは，ねぶたの周囲で跳ねる人々で，誰でも参加できるため，団体に所属しない大量のハネトが登場する。さらに，観光化が進み，毎年の人出は300万人を超えている。

このような祭礼の形態が成立したのは高度成長期のことである。本章では，戦後から高度成長期の変化を記述し，現在の形態が成立するまでの様相をまとめてみたい。

写真 1　青森ねぶた祭
竹浪比呂央作「田村麿と妙見宮の鬼面」青森菱友会（2011）

（2）地縁集団の撤退と企業の参入[2]

戦後の青森ねぶた祭は，1947年に「青森市復興港まつり」として復活し，規模が拡大していった[3]。1950年頃までは，町内会，青年団，消防団など，地域を母体とする団体と，地元商店や地元企業がねぶたを出した。その後，ねぶたの台数が増えたため，1953年からは，主催者が大型と小型を区別して扱うようになった。

図1は，1953年以降の大型ねぶたの台数である。特に高度成長の前期に当たる1955～1965年は，ねぶたの数が年により大きく増減していた。特に少なかったのが1960年頃で，1957年には12台，1959年と60年は戦後最低の11台であった。その後は1972年の13台まで，ほぼ一定台数を維持する。それが増加し始めるのが1973年で，一気に19台にまで増加する。1974年は15台，1975年は14台に落ち込むものの，以後は増加していく。高度成長期の低迷とその後の増加という傾向を見ることができるだろう。

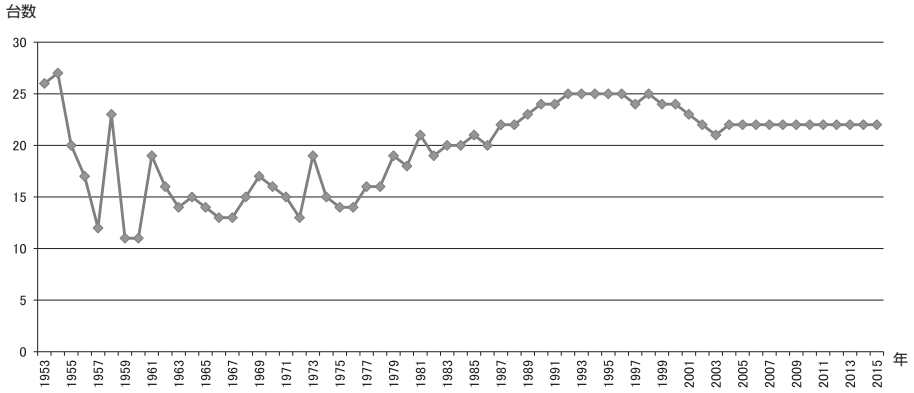

図 1　戦後の大型ねぶた台数

次に，1953年から1975年までに運行した団体数をタイプ別に集計した（表1）。

町内会，青年団，消防団など，地域を母体とする団体は，1950年代には多いが，1960年代に入ると減少していく。1回限り，あるいは数回で撤退した団体も目立つが，これは地域にとって，ねぶたへの参加を義務と感じていないため，都合がつかなければ休んだり，小型ねぶたに切り替えたりすることが容易だからである。そして1970年以降は，2団体（に組と消防第二分団）が，それぞれ「に組・東芝」「消防第二分団・アサヒビール」というように，企業と協力関係を結ぶことで継続していく。このように高度成長期には，地域を母体とする団体が大型ねぶたを諦めるか，小型ねぶたに転じていった。これは，経費の高額化が最大の原因である。(4)

表1　運行団体のタイプ別の数

年	地域	地元店舗	全国企業	公共団体	合計
1953	13	4	4	2	23
1954	12	9	5	2	28
1955	10	6	4	2	22
1956	7	5	4	1	17
1957	7	2	4	0	13
1958	11	3	5	1	20
1959	6	2	3	0	11
1960	6	1	2	2	11
1961	10	3	3	3	19
1962	7	4	2	3	16
1963	3	4	4	3	14
1964	3	4	4	5	16
1965	2	4	3	5	14
1966	1	2	3	7	13
1967	1	2	5	5	13
1968	3	3	5	4	15
1969	1	2	7	7	17
1970	2	2	8	4	16
1971	2	2	4	7	15
1972	2	2	4	5	13
1973	2	3	6	8	19
1974	2	3	4	6	15
1975	2	2	3	7	14
総計	115	74	96	89	374

地元店舗（と同業者組合）は，日本の都市では古くから，祭礼にスポンサーとして積極的にかかわった。青森でも戦前から，当時羽振りの良かった商店や会社が競ってねぶたを出していた。その伝統は戦後にも受け継がれ，熊地組，木材青年会（のち青壮年会），魚市場（魚河岸）などが早くからねぶたを出した。しかし1955年頃から，地域を母体とするねぶたと同様に，地元商店の出陣が減少した。比較的遅くまで残った青森木材青年会も，1980年を最後に撤退した。また，青森県板金組合は，比較的遅く1964年に運行を開始し，1970年からは大企業との合同もしくは支援を受けて現在も運行している。

地域と地元店舗に代わって増加するのが全国企業である。非常に早かった日本通運（1947年開始）のほか，東北電力（1950年頃開始），電電公社（現NTT，1950年頃開始）などが比較的早く参入し，やや遅れて大洋漁業（現マルハニチロ，1953年から断続的に参加し1969から毎年），日立（1965年開始），ナショナル（現パナソニック，1961年から断続的に参加し1978年から毎年）などが登場する。祭りの衰退を心配した青森観光協会が，全国企業に出陣を勧めたという話も聞いたことがある。

公共団体も1964年頃から増加する。具体的には市役所，自衛隊，県庁，国鉄，青年会議所などである。1964年以降は青年経営協議会，農協などが登場し，常に5台以上の状態が続く。これら

の団体の多くは，一度登場すると恒例になり，毎年登場するようになる。

高度成長期の前期には，連続して出続けた団体が少なく，簡単に参入し，簡単にやめていく団体が目立つ。これに対し，1960 年代後半になると，連続出場する団体が増える。現在の運行団体（22 団体）のうち 15 団体が 1975 年には登場しており，顔触れの基本は，この時期に出そろったと見ることが出来るだろう。

（3）観光化[5]

1962 年，青森観光協会では 5 月の理事会で，ねぶた祭に最重点を置いた事業計画を定めた。そして県外への PR 活動に乗り出す。この観光宣伝キャラバンが，ねぶた祭観光化の大きな要因となった。

1962 年には「東北三大祭」ツアーが始まった[6]。5 月に青森観光キャラバンが仙台と秋田を訪問した際に話し合った結果，企画には賛成だが日程の重なりが問題とされた。一方，国鉄も周遊ツアーを計画していた。そこで 3 市との折衝の結果，祭りの日程を変えないまま，モデルケースとして一列車運転することになり，専用列車による三大祭観光が実施された。1963 年にはこのツアーが 2 本に増えた。1964 年には，日本交通公社が東北三大祭観光団を「特別企画旅行」として重点的に取り組んだ。

こうして団体客が増加したことが，祭りの内容にも影響を与えることになった。

青森ねぶた祭の中心行事は，ねぶたの合同運行である。観光化に伴い，合同運行の日程が増加していった。

ねぶたの運行は，かつては団体ごとに好きな場所を運行するのが基本であり，審査のある 6 日夜と，7 日昼のみ合同運行を行った。とはいうものの，どの団体が出るかはその時にならないとわからなかった。

合同運行に大きな変化が起きたのは 1953 年である。この年から主催者は，大型ねぶたと子供ねぶたを区別するとともに，合同運行日を分け，子供ねぶたは 8 月 3，4 日，大型ねぶたは 6，7 日とした（1954 年までは旧暦で実施）。

大型ねぶたの数が 10 台強でほぼ一定する 1960 年頃になると，確実にたくさんのねぶたを見ることができる合同運行を，市外からの集客手段として宣伝するようになった。そして 1962 年からは，5 日にも大小合同の運行を行った。

こうして，ねぶた祭の期間中は毎日何らかの合同運行が行われたが，1965 年に問題が起きた。初日にあたる 8 月 3 日夜は「子供ねぶた合同運行」と「大型ねぶた自由運行」のはずであったが，ねぶたが出なかったのである。また 1967 年にも，初日，2 日目と大型ねぶたが運行しなかった。この頃は合同運行といっても，参加は団体の自主性に任され，費用負担を減らしたい団体は休む日も設けていた。また，主催者と団体の事前打ち合わせも十分ではなかったことから，このような結果を招いた。そこで主催者は，1968 年以降，初日から必ず大型ねぶたが運行するように担当日を割り振ることにした。この年以降，祭り期間中は毎日必ず大型ねぶたが運行することになった。

さらに観光客の増加に伴い，1979 年には日程を 1 日延長し，8 月 2 日から 7 日まで 6 日間とした。これは，1978 年に市制 80 周年を記念して 8 月 2 日に行った前夜祭が好評であったためである。

また，1981年からは8月1日に，本格的な前夜祭を開催している。

観光化に伴い，団体客のための観覧席が1960年に初めて設置された。1962年には，青森市と青森観光協会が，5日夜に600人分，6日夜に3,000人分の観覧席を設けた（『東奥日報』1962.7.26）。しかし観覧席とはいっても，県外団体客用に縄張りしムシロを敷いた（『東奥日報』1962.5.27）だけのもので，団体席と呼ぶべきだろう。

この団体席が「有料観覧席」となるのは，1963年とも1968年ともいう。1968年には，1日あたり2,000人の有料観覧席を設置しながら超満員（『東奥日報』1968.7.24）という人気であった。以降，観光客の増加とともに有料観覧席が増えていく。

このように，観光客に観覧席を販売した結果，ねぶた祭は簡単には中止できなくなった。このことが問題になるのが雨の日である。ねぶたは紙でできているため水には弱い。濡れれば色が落ち，紙が破れる。このため，雨の日は中止という判断にも妥当性がある。しかし中止になった場合，観覧席の料金払い戻しは現実的ではないため，中止にはできない。その結果，雨の日はねぶたに大きなビニールをかぶせて運行することになった。これがいつ始まったかはまだ確認できないが，1964年の写真にビニールをかけたねぶたが写っていることから，この頃から行われていたものと思われる。

（4）主催者の変化[7]

戦後復活したねぶたは，港まつりというイベントの一部に位置づけられた。行事の主催者も行政主導と言ってよいものであった。1958年に青森ねぶた祭の名に改まるが，港まつりとして復活後11年間続いたことの影響が，特に組織面に見られる。

ねぶたが本格復活した1947年には，主催は青森市と青森海運局であったが，1948年からは，青森市土木課内の「青森文化観光協会」が港まつりを主催した。1950年には青森市経済課に観光行政が移管される。そして1952年には，観光事業を市役所から切り離して青森商工会議所内に移し，「青森観光協会」が組織された。そして市役所は共催団体になった。［青森観光協会　1977］

青森観光協会は商工会議所内に置かれていた。このため商工会議所も主催者に加わり，事務局こそ青森観光協会に置かれたものの，主催団体は青森観光協会，市役所，商工会議所の三者共催になっていく。このため，例えば1956年の「昭和31年度『青森みなと祭』役員名簿」を見ると，市長が名誉大会長，商工会議所会頭が名誉副大会長を務め，観光協会会長が大会長となり，副大会長は市会議長，同副議長，市助役，商工会議所副会頭らである。また，後援団体として，青森青年会議所，東奥日報社，青森民報社，青森放送局，ラジオ青森，青森市教育委員会，青森市交通部，盛岡鉄道管理局青森駐在部，青森駅，国鉄青森自動車営業所，青森市消防本部，日本交通公社青森営業所，東急観光東北事務所，青森市旅館組合，青森専門店会，青森商店会，青森市写真材料商組合，東北海運局青森支局，青森海上保安部，青森海員組合が名を連ねている。このように，主催3団体を全市的にバックアップする組織が港まつりの段階で作られ，それがねぶた祭に引き継がれていく。

主催者はねぶた祭の運営に際して，さまざまな委員会を組織して作業を分担した。その原型は港まつりの時期に既に出来上がっていた。1955年の「開港五十周年記念『青森港まつり』役員名簿」

を見ると，業務内容と行事に応じて，総務部，宣伝部，ねぶた運行・仮装コンクール部（運行班と審査班に分かれる），ねぶた海上運航と記念行事部，町内舞踊大会，町内対抗装飾コンクール，森山弥七郎翁墓前祭，新市域芸能大会，花火大会，全国チンドン屋大会，商工カーニバル，照明コンクール，青森芸妓手踊大会，県下民謡手踊大会，港まつり写真コンクール，以上 16 の部署ごとに担当者を決めていた。各部署に配置されたのは，主催 3 団体と後援団体の関係者である。このうち青森観光協会については専従職員も少なく，役員に名を連ねた市内の観光関連業者が担当していた。

こういった組織形態はねぶた祭に名称が変わっても基本的に継承された。港まつりの時にあったさまざまな行事は徐々に整理されていくが，組織形態の基本は変わらず，1970 年になっても，総務委員会，宣伝委員会，渉外委員会，前奏パレード委員会，子供ねぶた委員会，ねぶた運行委員会，奨励委員会，海上運行委員会，前夜祭委員会，花火大会，以上 10 の委員会に分かれていた。1977 年には青森観光協会が任意団体から社団法人化し，同時に主催 3 団体が「青森ねぶた祭実行委員会」を結成して主催団体となった。そして委員会も，総務委員会，奨励委員会，運行委員会，渉外委員会，海上運航委員会の 5 委員会に集約されていった。このように集約されていくものの，祭礼をいくつかの内容に細分し，担当者がいわば業務として運営する形態は一貫していた。

（5）ハネトの自由参加

青森ねぶた祭の特徴として，大量のハネトの存在がある。ハネトは自由に参加できるのが売り物であり，観光客にも門戸が開かれている。しかし，この仕組みが出来上がったのはさほど古い事ではない。

戦後しばらくは，ハネトとしてねぶたの隊列に加わるためには，運行団体名が入った浴衣を着用する必要があった。このため，運行団体の関係者か，そのつてで浴衣を手に入れることが出来る人以外は，ねぶた祭に参加できなかったのである。

ところが 1970 年頃に，運行団体の浴衣を着ていなくても参加が認められるようになった。その転換点は，1968 年の門戸開放にあると思われる。1968 年の『広報あおもり』には，「青年会議所で運行する観光ねぶたには，観光客をはじめ一般市民のみなさんが，自由にハネトとして出ることができます」「観光客をはじめ，一般市民だれでも出ることができます。出たいかたはあらかじめ申し込みしてくださればさいわいです。ハネトはゆかた（どんなゆかたでも結構です）と，ぞうりのお支度はお忘れなく」（『広報あおもり』1968.8.1）と記されている。そして観光客だけでなく，団体と無関係な一般市民もハネトに加わり始めたのである。

同じ頃，一般市民や観光客向けに「青森ねぶた祭」と染め抜いた浴衣が広く販売された。これを着ていれば，どこの団体であれ，ねぶたの隊列に入って跳ねることが可能になった。そして「誰でも参加できる」ことを，主催者がねぶた祭の特徴として打ち出していく。こうして一般市民の参加が増えただけでなく，衣装を販売したり貸し出したりする店が増え，観光客の参加が容易になった。

その結果，高度成長期の末期から，青森ねぶた祭は匿名性の高い参加形態が成立し，特定の団体に所属しない大量のハネトが行列する祭礼になったのである。

（6）ねぶたの遠征[8]

ねぶたが青森以外の場所に招かれることを，青森では「遠征」と呼んでいる。戦後，札幌や函館遠征はあったものの，遠征が本格化するのは1970年の日本万国博覧会（大阪万博）への出演以後である。この時はお祭り広場で「日本の祭り」と称した催し物があった。これは全国から59の祭り・民俗芸能を集め，7～8月に6回に分けて披露したイベントであった。また，1971年から84年まで，毎年8月に東京・神宮外苑で「日本の祭り」と題するイベントが開催された。これは全国から毎年12の祭りを招き公演するというもので，青森ねぶた祭と阿波踊りは全回出場した。以後，知名度が上がったため，海外を含めた各地に出かけ，青森を代表する存在として，ねぶたがPRに広く使われている。

（7）変化の特徴

青森ねぶた祭は，1960年代に地域ねぶたの数が減少した。大型ねぶたの台数そのものが1959年と1960年に戦後最低を記録し，中でも地域に基盤を置くねぶたは，1970年以降は2台だけになった。これに代わり，1970年代には公共団体や全国企業が参加し，大型ねぶたの主力を占めるとともに，1975年から台数が増加した。また，1962年に青森観光協会が，ねぶた祭を最重点に置いた計画を定め，東北三大祭ツアーが始まった。1968年からは毎日大型ねぶたが運行するようになり，団体客の増加が日程の増加や観覧席の増加につながった。主催者の組織化は戦後から進行していたが，ハネトは組織化とは反対に自由参加を容認したことが増加につながった。このほか，各地へねぶたが遠征してPRに努め，また1980年に国の重要無形民俗文化財の指定を受けた。

❸……野田七夕まつり

（1）概要

本章は，千葉県野田市中心部で8月上旬の土曜日曜に行われている七夕まつり（写真2）を中心に，各地の七夕まつりの変遷を扱う[9]。

色鮮やかな竹飾りを飾る七夕まつりは，戦後に盛んになり，高度成長期前半に各地で盛大に行われた都市祭礼である。しかし民俗学における七夕研究は，ほとんどが七夕の起源に注目し，都市で盛大に行われた七夕まつりを視野の外に置いてきた。祭礼研究の分野では，「神」とのかかわりが見られな

写真２　野田七夕まつり（2009）

い七夕まつりを「祭礼」ではなく「イベント」として軽視してきた。また，社会学の流れを汲む祭礼研究では，地域社会の結節点として祭礼を捉える傾向があるため，町内会や自治会とは異なる商店街の催事はあまり扱われてこなかった。一方，イベント研究は，流行や新しい発想を追うことには熱心であるが，七夕まつりは伝統的年中行事に由来すると思われ，考察の対象外になっている。

こうしたことから，本章では七夕まつりを取り上げ，高度成長期の変遷を追うことにする。

（2）七夕まつりの成立と普及

都市の七夕まつりとして最も知名度があるのは，宮城県仙台市の七夕まつりである。(10)

仙台の七夕は近世から続くものの，一度衰えた後，1926 年に一商店街の装飾に採用されて復活した。やがて他の商店街にも装飾が波及し，1928 年からは仙台商工会議所と仙台協賛会（のちの仙台観光協会）が，飾りを審査・表彰する「七夕競技会」を始めた。賞を目指す競い合いから作品の質が向上し，近郊からの見物客も増え，集客力のある行事に発展した。そこで商工会議所は，県外からの観光客誘致に力を入れた。その結果，全国的に著名な行事にまで発展していった。

仙台の成功を受けて，各地で七夕まつりが盛んに行われ始める。まずは宮城県内，そして岩手県，福島県など東北各地，そして戦後には関東以西にもその流行が及ぶのである。

こうした普及について，愛知県安城市商工課は 2003 年に，七夕まつり開催 100 都市を対象にアンケート調査を行った。まず行事の性格は，伝統的な習俗が基になった「習俗系」29 カ所，商業振興を目的とした「商業系」66 カ所，宗教祭祀が基になった「宗教系」8 カ所，商業に限らず地域振興を目的とした「地域活性化系」25 カ所，「その他」21 カ所（1 つの行事が複数の性格を持つ場合には両方で数える）。次に開始年は，習俗系は大部分が「大正以前」開始に対し，「商業系」は 66 カ所のうち「昭和 26 ～ 30 年」が 23 カ所，次いで「大正時代以前」の 12 カ所，「昭和 41 年以降」の 10 カ所が続く。1951 ～ 1955 年にピークをなす理由を，「戦後，日本がようやく復調の兆しを見せ始めたころ，人々は星空に将来の経済発展の夢を託したのである」［斎藤　2003］としている。

1951 ～ 1955 年に始まった商業系七夕まつりの開始理由を見ると，東京都福生町（現，福生市，1951 年開始）では，近隣都市に対抗するための商店街振興策として，仙台居住経験者の提案で七夕まつりを実施することになった。1951 年に中央商栄会の中元売出しの宣伝として始めたことが発祥となり，翌年から町内全域の商店街に広がったという［佐藤　1971］。愛知県安城市（1954 年開始）では，近隣都市のように（岡崎の花火，刈谷の万燈祭，一色の大提灯），市のメインになる祭りを作ろうという動きと商店街の夏枯れ対策から，仙台や平塚の七夕まつりをヒントに七夕まつりを始めることにした。前年に開始した静岡県清水市の七夕まつりを視察して，飾りの作り方などを習得したという［稲垣　2003］。

神奈川県平塚市は，復興のめどがついた 1950 年に「復興まつり」を開催した。この催しが好評であったため，翌年以降も何らかの行事を検討した結果，仙台出身の商工会議所副会頭の提案により，仙台を真似た七夕まつりを開催することになった［平塚七夕まつり実行委員会　1981］。こうした経過から伝統とは無縁であり，平塚では新しい集客の試みに積極的であった。復興まつりの時からあったステージ行事のほか，ミス七夕の選出（1951 年），「平塚七夕音頭」（1952 年），「平塚恋

しや」（1953年）という歌と踊りの製作，写真コンクール開催（1953年），一戸一本飾りつけ運動（1955年）といった試みを積極的に展開していく。観客数では，早くも1956年に平塚が130万人に達し，仙台の120万人を追い越す（ただし祭りの期間は，仙台の3日間に対し平塚は5日間）。

このように，各地で1951～1955年に，七夕まつりは商店街の大売り出しや夏枯れ対策，近隣都市を意識した商業振興から誕生した。実施に当たっては，地域の伝統ではなく，先行して始まった他都市を参考にした[(11)]。その一方では，すでに開始理由が不明となった例も多い[(12)]。何気なく始まった商店街催事が発展して年中行事化したためと考えられる。

（3）野田の七夕まつりの開始

次に，野田市の七夕まつりの舞台について概説する。

野田市は，千葉県内陸部の西北端，利根川と江戸川に挟まれて位置し，茨城県と埼玉県に接する。七夕まつりの場は，1950年の市町村合併以前の野田町の中心部である。南北に走る県道結城野田線に沿った商業地域であり，北から順に上町，仲町，下町がある。近世から近代にかけて，江戸川と利根川の船運の拠点となる河岸が栄え，また特産の醤油が全国的なブランド（キッコーマン醤油，キノエネ醤油）に成長していった。1896年に開通した常磐線は野田市を通らなかったが，1911年に野田と常磐線柏駅を結ぶ県営軽便鉄道が開通した。現在の東武アーバンパークライン（野田線）であり，旧野田町には清水公園，野田市，愛宕の3駅がある。鉄道開通とともに船運は衰退し，河川交通の拠点であった野田町の重要性も低下した。戦後は1950年に野田町と周辺3村が合併して野田市制を施行，1957年には周辺2村と合併した。1970年代になると，東部を南北に走る国道16号沿線に工場が進出し，やがて工業団地に集約されていく。また宅地造成と東京のベッドタウン化が進む。こうして高度成長期には発展した野田市であるが，東京直結の鉄道がないこともあり，戦後は増加の一途をたどった人口も2000年をピークに伸びが止まり，以後は約15万人で安定する［野田市企画財政部企画調整課　2016］。また，商業施設の郊外化も進み，早くも1970年，愛宕駅付近にイトーヨーカドーが開店，1989年には国道16号沿いの野田市中根に巨大なショッピングモール，ノアが開業。1993年には市役所も郊外に移転した。こうしたことから商店街には閉店する店舗も増え，空洞化が目立ち初めている。

千葉県野田市における七夕まつりの開始時期ははっきりしない。

本稿執筆時の2016年は「第65回　野田夏まつり躍り七夕」が開催された。このように七夕の開催回数を数えて「第〇回」と掲げたのは1973年からで，この年は第22回を称している（それ以前は行事名に回数を冠していない）。ここから逆算すると，中断がなければ1952年が第1回になる。しかし，当時の様子には不明な点が多い。

野田市が市の広報を発行するのは1954年11月からで，七夕の記事は1955年から掲載され始める。それ以前の様子は新聞に断片的に掲載されている。

新聞紙上における七夕の記事は，管見の限りでは1950年8月7日付『千葉新聞』が初出である。「野田市上町通り商店街九十店は市制記念に街路照明とサーヴィスの改善をはかることとなり，街燈八十燈を新設し七日から一週間七夕祭を催し商品買い上げに福引き券を出すこととなった。」（『千葉新聞』1950.8.7）。このように，市制施行を記念して1週間七夕まつりを催し，福引き券を出

したと記されている。実施主体は本町の中の上町通り商店街となっている。

翌 1951 年には七夕の記事がなく，次に登場するのは 1952 年である。「野田市本町会の商店街では二階の軒にまでとどく大竹を飾り，七夕特売デーでこの程お目見えした。各店頭のネオンが美しく明滅し客足を引いていた。」（『毎日新聞千葉版（三）』1952.8.8）。主催は「本町会」とあることから，上町に仲町と下町も加わったものと思われる。こうしたことから，後にこの年を野田市の七夕まつりの基点と定めたのであろう。

発端は「特売」であったかもしれないが，こうして野田市の七夕まつりが毎年の恒例となり，広く知られていくのである。

（4）県内七夕まつりの競争

野田市で七夕まつりが始まった頃，千葉県内各地でも同様の行事が始まっていた。

このうち，早くから始まって知名度が高かったのが，館山市の七夕である。開始時期は，1952 年の『千葉新聞』には「この祭は三年目を迎えた」（8 月 9 日）とある一方，『毎日新聞』千葉版（二）には「今年で四年目」（8 月 8 日）とあることから，1949 ～ 1950 年から始まったものと思われる。

他地域と比較する言い回しも記事に登場した。「関東一と誇る館山市七夕まつり」（『毎日新聞第二千葉版』1953.8.8），「いまでは七夕祭の元祖といわれる仙台をむこうに回す豪華なもの」（『毎日新聞千葉版（二）』1954.8.6），「東北名物仙台七夕祭りとならんで関東一の名物行事として全国的に知られる」（『千葉新聞』1954.8.8）というように，「関東一」で仙台にも匹敵する行事という報道が基調になってくる。

1955 年頃から，各地で七夕まつりが続々と始まる。1954 年に茂原，1955 年に千葉，南総町牛久，旭，1956 年に木更津，1959 年に銚子，松戸，船橋，1960 年に市川市若宮で七夕まつりが始まるのである。[13]

こうなると，七夕まつりの比較，あるいは都市間競争が生じることになる。1955 年には，館山について「県下七夕祭の元祖」「やっぱり館山の王座はゆるがない」（『毎日新聞千葉版』1955.8.8）という報道があった。翌年は「七夕祭の本場館山」という見出しの下，「関東一を誇る館山市銀座振興会の七夕祭は七日から始まった。最近県下でも千葉，茂原などの進出が目立ち，草分けの館山をしのぐものがあるというので今年は特に意匠にも工夫がこらされ，さすが“本場館山”の貫禄を示すみごとな出来栄えであった。」（『毎日新聞千葉版（三）』1956.8.8）。これに対し野田の記事でも，「茂原，館山両市をしのぐといわれた」（『毎日新聞千葉版』1955.8.8）という表現があった。茂原の記事でも「県下一をほこる茂原市の名物たなばたは，七日からはじまった」（『千葉日報』1960.7.8）と記されていた。

このように各地で 8 月（茂原は 7 月）に商店街が七夕まつりを始めた理由としては次のことが考えられる。第一に，商店街の「夏枯れ」時期と言われる 8 月に集客策を欲していた。第二に，準備が比較的簡単であり，さほど費用をかけなくても始めることができた。第三に，七夕飾りの製作は個人的な作業であり，地域での共同作業は少ない。空き時間に家で作業をすれば良いので，準備がさほど仕事の妨げにならなかった。第四に，商店は祭り期間中も営業するため，店の前に飾りを出

すだけでよい七夕まつりは，店を離れずに行うことができた。こうした理由から，各地で手軽に取り組むことができたのであろう。

（5）七夕まつりの転換期

1955年頃に千葉県内で続々と誕生した七夕まつりのうち，現在まで続いているのは，野田，茂原，旭だけである。他の都市は長くても十数回で終了してしまう。

このうち館山の七夕まつりは，1958年に，南房総国定公園指定を記念して始まった「館山商工まつり」の一行事になる。祭りの内容は，ミス館山コンテスト，自衛隊音楽行進，商店主による仮装行列，宣伝カー60台の「広告カーニバル」，花火大会，灯籠流し，関東高校水上競技会などであった（『館山市広報』1958.8.20，『毎日新聞千葉版（二）』1958.8.8）。行事はさらに大規模になり，1964年からは「館山観光まつり」と改称する。東京からの観光客を強く意識した改称であった。ところが多彩な行事の中で，七夕の比重が下がり，花火大会や民踊大会に重点が移っていく。そして七夕は，新聞紙上では1969年まで記載があるものの，1970年に姿を消す。

一時は盛大に行われた千葉市の七夕まつりも，1965年を最後に報道が見られなくなる。他の都市の七夕まつりも，新聞紙上から姿を消していく。

このように1965～1970年頃に，各地で七夕まつりが終わっていくのである。その理由は個別の調査を待ちたいが，売上げの点では開催するメリットがなかったこと，当地に別の夏祭りが存在したことなどが推測しうる。一方，1955年以前に始まった野田と茂原が続けたのは，他に大きな夏祭りがなかったことに加え，県内の先駆者としてのこだわりがあったかもしれない。とはいうものの，内容はその時期に大きく変容を遂げた。

野田市でも，1970年から日程を4日間から3日間に縮小した。1972年には，野田市が主催団体に加わり，運営の中心になった。さらに行事内容も変化した。最大の変化は1972年の踊りパレードの開始であった。婦人会を中心とする460人が，「野田盆踊り唄」を踊りながら目抜き通りを3時間パレードしたのであった。

こうして踊りパレードは，竹飾りとともに七夕まつりの第二の恒例行事になり，参加人数も増えていく。規模は年により差があるが，1982年には約1,500人が参加3コースに分かれて踊った（『野田市報』1982.9.1）。1984年には約2,000人が参加（『野田市報』1984.9.1）した。

パレードの主役となったのは婦人会，企業・事業所，舞踊愛好団体であった[(14)]。市が主催になったため，踊りパレードは市民に広く門戸が開かれ，地域や職場，愛好団体を経由しての参加が可能になった。竹飾りを担う商店街とは別の人々がパレードの担い手となり，祭りの基盤が広がったのであった。

なお，踊りパレードは他都市の七夕まつりでも取り入れられた。例えば平塚の七夕まつりは1951年から始まったが，翌1952年には「平塚七夕音頭」，1953年には「平塚恋しや」という民謡を作り，踊りパレードを取り入れた［平塚七夕まつり実行委員会　1981］。七夕の本家を自称する仙台も1961年からパレードを行っている。一方，千葉県でも茂原では，1959年から仮装行列が始まり（『広報もばら』1994.7.5），1966年に作られた茂原音頭を中心としたパレードに変わった（『千葉日報』1966.7.9）。

このようなパレードの導入により，動きのない竹飾りとは違った，動的な要素が祭りに加わった。また，音楽が流れたことで賑やかさをもたらした。このことは，祭りを盛り上げる上では非常に効果的であった。しかしその一方，七夕まつりの性格を曖昧にし，一般的な「市民祭」へ近づけていったのである。

（6）「市民祭」へ

高度成長期の終わり頃，踊りパレードを中心とした祭りが各地で作られた。例えば野田市から近い柏市では，高度成長期に各商店街で七夕まつりを行っていたが，1969 年から柏銀座通り商店街が阿波おどりパレードを開始した。1971 年に「柏おどり」ができると，そのパレードを中心とした「柏商業まつり」が始まった[15]。運営は商工会議所，市観光協会，各商店街からなる実行委員会が担った。祭りは 1978 年から「柏まつり」と改称し，多様な内容を含む盛大な行事に発展している［柏まつり実行委員会　1998］。

船橋市では 1968 年に，市内の商工農業と観光を市民に紹介することを目的に「船橋産業まつり」を開始し，展示のほかに新船橋音頭踊りパレードを取り入れた（『船橋市広報』1968.7 月号）。このパレードには間もなく音楽パレード，神輿パレードも加わり，1972 年には多彩な内容を含む「船橋市民まつり」と称する大パレードに成長する（『船橋市広報』1972.7 月号）。2003 年からは「産業まつり」の名を廃し，行事全体を「ふなばし市民まつり」と改称している。

こうした祭りの特徴は，市役所や商工会議所が主催し，広く市民に参加を呼びかけ，多彩ではあるが互いに無関係な催しを含み，新企画を取り入れることに積極的で，宗教行事を含まないといった点にある。具体的な形態としては，パレードとステージ行事が中心となる。こうした祭りを総称して「市民祭」と呼ぶことがあり，1970 年の大阪万博以後に急増する。こうした点を踏まえると，野田市における七夕まつりの変化は，まさに市民祭への変化であり，全国的な傾向を反映したものと見ることが出来るであろう。

（7）人出の減少

野田市の広報誌『野田市報』には，七夕まつりの賑わいを示すため，毎年ではないが祭りの人出が記されている[16]。

市が主催団体に加わった 1972 年には，「延十万人の人出で賑わいました」，1975 年には「延十五万人の人出でにぎわいました」と，切りのいい数字が掲載されている。

1979 年には，篠塚義正市長が「市長室から」というコラムで「野田七夕まつりは，今年で二十八回目を迎え，夏の風物詩として市民生活の中にとけこんでおり，仙台，平塚両市の七夕まつりについで全国第三位の規模だといわれています」（『野田市報』1979.9.1）と書いているが，3 位の根拠は挙げていない。

1982 年には 7 年ぶりに人出の記載が登場する。初日が雨天中止であったにもかかわらず「七夕まつりの人出は両日合わせて約十七万人にのぼりました」としている。1983 年は，「過去最高の二十七万五千人の人出」，1984 年は「二十七万六千人の人出で賑わった」と，着実に増加し，結果的にこの 27 万 6 千人が人出のピークになる。

1985年は約25万人と，前年よりも少ない数を掲げている。次に人出を挙げるのは4年後の1989年で，延べ16万5千人とあり，4年間で10万人近く減少したことになる。1990年は約17万5千人で前年比プラスであるが，1992年は9万2千人で，大幅な減少である。その後は1993年が11万人，1994年が12万人，1995年が約8万人，1998年が約13万人，1999年が約14万人，2000年が約15万人と，10万人台が続く。

祭りの人出は，一般的に天候と曜日に大きく左右される。特に雨天中止の日があるとその年の総人数は激減する。このため，1年ごとの数字の増減から何かを読み取ることは難しい。しかし長期的には，主催者発表数の増減が，行事の盛衰をある程度反映していると見るべきであろう。そうすると野田の七夕まつりは，1980年代前半に観客動員のピークがあり，1985年から1990年頃に急減したと推測できる。そして2002年には，それまでの金～日の3日間開催から，土曜日と日曜日の2日間開催へと日程を縮小したのであった。

（8）変化の特徴

商店街の集客策として1951～1955年に広く普及した七夕まつりは，飾りだけでは飽きられる等の理由で，千葉県内では1965～1970年頃に中止になっていった。野田市では1972年に，野田市が主催団体に加わり，商店街の竹飾りとは別に踊りパレードを開始した。これは各地で市民祭が盛んになっていく時期と重なっている。これにより七夕まつりが市民祭に近づき，人出は1970年代を通じて増加して，1985年にピークを迎えたのである。

❹……となみ夜高まつり[17]

（1）概要

となみ夜高まつりとは，富山県西部の砺波平野中央部に位置する砺波市の中心部・出町地区で，6月第2金曜日と次の土曜日に行われる祭礼である。現在の祭礼は，参加する町が夜高行燈と呼ばれる，高さ6～7mの大型の行燈山車を制作し，巡行したあと，最後には正面衝突させて壊し合うという，迫力あふれるものである（写真3）。

砺波平野では，このように山車形の大型行燈を引き回し，衝突させる祭礼が各地で行われている。なかでも南砺市福野の「福野夜高祭」，砺波市庄川の「庄川観光祭」，小矢部市津沢の「津沢夜高あんどん祭り」，そして本稿で取り上げる砺波市出町の「となみ夜高まつり」の4つが著名である[18]。

写真３　となみ夜高まつり（深江対新栄町，2015）

これらの祭礼は，福野神明社の祭礼として行われる福野を別にすれば，特定社寺の宗教行事ではなく，農村で田植え後の休み

を祝う「田祭」に由来するという。確かに，現在でも田祭あるいはヨータカと称する行事が，6 月 10 日に砺波平野のあちこちで行われ，子どもたちが田楽行燈などと呼ばれる小型の行燈を手に持って村を回っている。また，上記の 4 箇所ほど大きくはないものの，中型の行燈を山車のようにしつらえて曳き回す地域もある。夜高行燈はここから発展したという由来説は不自然なものではない。

とはいうものの，子どもたちが行燈を手に持って歩き回る祭りと，大規模な都市祭礼は異質のものである。由来は別にして，大規模な祭礼に発展するまでには，さまざまな段階があったものと思われる。本稿は，砺波市出町の行燈の祭礼が，戦後の発展，1960 年代の中断を経て，1980 年代に「となみ夜高まつり」という都市祭礼に発展する過程を紹介する。

（2）現在のとなみ夜高まつり

砺波市出町地区は，JR 城端線砺波駅を中心とする商業地区である。散居村で知られる砺波平野の中央部に位置し，近世から市場町として発展が始まった。1889 年の 9 村合併により出町が成立し，1952 年に周辺 9 村を編入し砺波市となった。

砺波市全体の人口変化は，1950 年（46,026 人）から 1970 年（41,403 人）までは一貫して減少するが，ここから増加に転じ，2005 年（49,429 人）にピークに達する（いずれも国勢調査人口［砺波市　2015］）。北陸自動車道の砺波 IC が 1973 年に設置され，砺波平野における自動車交通の拠点となった影響は大きい。また，郊外型商業施設も出店している。中心部である出町は，戦後に商店会を形成し，商店街が発展するが，中心部には 1960 年からスーパーマーケットなどが登場して発展する一方，郊外のバイパス周辺に移転する店舗も出てきた。1964 年には市役所が出町から少し離れた栄町（現在地）に移転し，その周辺にも商業集積が進んだ。1974 年には新富町に大型ショッピングセンター（現イオン砺波店）が開業したのを始め，郊外に大型量販店の開業が続き，特に 1991 年の大店法改正により郊外での競争が激化した。そのため出町の商業地区の衰退が進んでいった。商店数では 1982 年，商品販売額では 1994 年がピークであるという。［柳井　2005］。

とはいうものの，出町地区の人口は，2013 年 10 月の 8,400 人から，2016 年 10 月には 8,597 人に増加するなど（住民基本台帳による），微増を続けている。これは北陸自動車道砺波 IC が立地し，また高岡市や富山市に通勤圏内であるなど，自動車交通の便が良いことによると思われる。

次に，となみ夜高まつりの現在の様子を簡単に紹介する。

各町が曳き廻す行燈は，祭りの山車に似た形で，大きいものでは高さ 6m にも及ぶ。竹と紙の造形であるため，毎年新しく作るのが特徴である。制作には 1 ～ 3 ヶ月を要する。竹で骨組みを作り，和紙を貼り，蠟引きをし，彩色する。中には電球を入れ，台車に積んだバッテリーを電源にして照らす。行燈の構造は，砺波，福野，津沢，庄川のどこも基本的に同じで，台の上に立てた心木（真木とも書く）に，下から順に，田楽（デンガクまたはレンガク）という直方体の行燈，傘鉾と呼ばれる幕，山車（ダシ）と呼ばれる行燈を取り付ける。山車から，釣り物（吊り物とも書く）と呼ばれる行燈を前後につり下げる。前後に伸びる練り棒（台棒ともいう）を若い男たちが押して動かすのであるが，現在では台の下に車輪を入れる。

となみ夜高まつりの主催は砺波夜高振興会である。振興会は，出町自治振興会長を会長とし，副会長は砺波商工会議所副会頭，砺波市観光協会副会長，砺波市自治振興会協議会会長である。砺波

市商工観光課長と砺波商店会理事長，砺波市観光協会事務局長，それに参加各町の代表が理事に就任している。

2014年の行事は6月13，14日に行われた。1日目の夜は行燈の出来映えを審査する「行燈コンクール」が行われる。小行燈6本，大行燈15本が，順番に本町交差点に進入し，代表者が審査員に行燈の特徴をアピールした。審査が終わった行燈は本町通りに一列に並び，観客が美しい行燈の出来映えを楽しんだ。審査結果は直ちに集計され，表彰式が行われた。大行燈の場合，総合得点に従って，1位の市長賞以下8位までが受賞する（他に特別賞がある）。少しでも良い賞を受賞することがこの日の目標である。表彰式が終わると行燈は各町に帰って行く。

2日目は突き合わせが行われる。事前に決められた組合せに従い，北陸銀行前と富山第一銀行前の2箇所で各8組，全部で16組の「対戦」が行われた。1組は20分以内と制限時間が決まっている。登場した2つの行燈が20～50mほど離れて向かい合うと，双方の運行責任者（裁許）が中央に歩み寄り，同時にホイッスルを長く吹くのが開始の合図である。すると町の男たちが，行燈を前方横からは引き綱で引っ張り，後ろからは押して，正面の相手めがけて全力で走り出す。行燈の前方には練り棒が突き出ており，ここを相手の行燈にぶつけるのである。ぶつかった後は町によって戦法が異なる。練り棒を相手の練り棒の下に潜らせて押し込む，逆に練り棒を上げて相手の行燈を上から壊す，左右にゆさぶって相手の行燈を横向きにするなど，事前の作戦はあるが，行燈上のマイクを持ったリーダーの指示で，戦局に応じて作戦を変える。勝敗の明確な基準はないが，一方的に押し込むなど優劣がはっきりしたら，裁許のホイッスルで押し合いをやめる。制限時間内であれば，いったん離れて再度ぶつかり合う。時間管理は砺波夜高振興会の常任理事が行う。20分の制限時間内に2～3回の突き合わせが行われる。

こうして16組の突き合わせが終わると，終了の儀式「シャンシャン」がある。現在では，14町が「東5町」「西3町」「南北6町」の3グループに分かれ，別々に行っている[19]。各町の裁許1人，副裁許2人を中心に，行事が無事終了したことを確認し，儀式的な飲酒を行い，参加者が輪になって手拍子で締めくくる。どのグループもその年のまとめ役にあたる「当番裁許」を決めており，その引き継ぎも行われる。そして行燈は町内に戻って解体される。

（3）戦前から戦後の発展

現在見るような夜高行燈の様子は，必ずしも古くから行われていたわけではないようだ。

1965年に刊行された『砺波市史』では，「近世の砺波」の章の「庶民のくらしと楽しみ」の「年中行事」の部分に「ヨータカ」が登場する。「6月10日はヤスゴト（休事）とて田祭りとする。笹餅を作って業を休み，秋の豊作を祈る。この夜子どもたちはヨータカと称するあんどんをかざして家々を廻る。」［砺波市史編纂委員会　1965：599-600］。このように農村行事の田祭の紹介にとどまり，都市部の夜高行燈の記載はなかった。

しかし，都市部では戦前にすでに大型行燈が登場していた。『続出町のあゆみ―開町350年記念』には，「戦前の夜高は割り竹と竹ひごで作られ，行灯の灯はロウソクで，山車の上にロウソク係が登って灯の付け替えをした。突合せも双方の裁許の話し合いで決まり，場所や時間に関係なく対戦した。心棒が折れたり，ロウソクが倒れて夜高が燃えることも珍しくなく，今以上に厳しい動きで

あった突き合わせを『喧嘩』と呼ぶのは同じで，喧嘩が始まると誰かれなく夜高を押したものである。」［続出町のあゆみ編纂委員会　2008：59］とあり，行燈をぶつけ合う突き合わせが行われていたことがわかる。

このように，昭和初期にはすでに複数の町が大行燈を作り，町の範囲を超えて巡行し，時には「喧嘩」をしていた。

さて，行事は戦争による中断はあるものの，すぐに復活したようである。新聞記事上では，出町開町 300 年にあたる 1949 年が初出である。

「農家の慰安にかねて増産を祈る田祭は例年の通り九日から十五日ごろまでに夜鷹行燈をくり出して各村，各部落ごとに行われる。とくに出町では開町三百年祭の祝賀にあわせこれを盛大にするため，目下この行燈の作成中であるが，高さ丈余もある大行燈につける飾りものの工作費だけでも二万円，三万円というものが十数本も出るので賑わいが予想されている。」（『北日本新聞』1949.6.8）

次の新聞報道は 1952 年で，砺波町商工会と北日本新聞社の共催で行燈のコンクールを開催したというものである（『北日本新聞』1952.6.12）。また「田まつり　6 月 10 日，11 日」と記したポスターも作成されていることから，商工会が観光を意識し始めたことがうかがえる。

以後，1950 年代には祭礼が順調に発展していった。まず行燈の高さには制限があるものの，1953 年には 12 尺（約 3.64m，『北日本新聞』1954.6.5），1954 年には 14 尺（約 4.24m，『北日本新聞』1954.6.5），1959 年には 5.3m（『富山新聞』1959.6.9 夕刊）へと上限が徐々に上昇している。行燈の数は 1954 年に 40 本とあり（『北日本新聞』1954.6.12），これは現在までの最多と思われる。

（4）中断

こうして発展するかにみえた行事が，1960 年代に入ると一転して衰退する。

当時の新聞では，1960，1961 年の『富山新聞』には夜高行燈の記事が載っていない。『北日本新聞』には，1961 年に砺波市太郎丸で中学生が行燈に轢かれ 1 ヶ月の重傷を負ったと言う記事（『北日本新聞』1961.6.13）しかなく，出町の様子はわからない。郊外の太郎丸が出町に来るのは 1977 年からである。このため，この 2 年間は出町では行燈が出ていないと考えられる。

1962 年には，小中学校 PTA が行燈自粛運動を行っている。

「砺波市小中学校 PTA 連絡協議会総会は十日午後二時から出町中学校で永森市教育長，島上市教委総務課長らを迎え市内の小中学校長 PTA 会長ら約四十人が集まって開かれた。（中略）協議会では六月十，十一の両日市内一円にわたってくりひろげられる夜高あんどんは砺波地方に古くから残る行事だが，その主体が中学二年生をリーダーに小中学生がすべての準備をやっており，ひどいのになるとこどもたちが二十日前からお寺に泊まりこんでやるものや午前一，二時ごろまでかかるなど教育上悪影響が大きいと二，三年前から各地区の父兄の間で非難の声が高まっていたもの。話し合いでは年々各地が競争のあまりあんどんもはでになり，ときどき衝突して暴力ざたになることもある。しかしこれは各地区独自の行事であり，学校側としても禁止することはできないだろうから市全体の問題として考えるべきだ。夜高あんどんを早急に全廃するということは困難だからことしはあんどんも小さく自粛するよう連絡協議会から申し

入れるよう話し合った。」（『富山新聞』1962.5.12）

この記事では，夜高行燈に小中学生が夜遅くまで熱中し，教育上悪影響をきたすとPTA等がいうのである。そこで自粛運動が起きたのだが，効果はどうだったであろうか。

「砺波地方の田まつりは十，十一の両日行われた。田まつりは砺波地方に古くから残る宗教的な行事で田植えを終えた農民たちがこの日を年に一度の安息日ときめ，その年の豊作を祈るという素朴なまつり。ところが近年田まつりにつきものの夜高あんどんが年々競い合うため豪華になりすぎ，その準備の主体となる小中学生が多くの時間と費用をかけ，学業におよぼす影響が大きく各方面から自粛が望まれていた。同市では一カ月も前から市教委小中学校PTA連協，砺波地区補導連協などから準備期間は十日間ほど，毎夜おそくて九時まで当日のみ十時までとし，あんどんもミカン箱程度の角あんどんに各地区が自粛するよう各区長らを通じて伝えていたが全面的に協力したのは市街地の出町地区だけ。そのほかの村部はほとんどがいままでどおりのあんどんを繰りだした。なかでも太田，柳瀬，高波の各地区などは四，五メートルもある豪華な夜高あんどんをつくり小中学生が午後十一時ごろまでひき回っていた。またある地区ではあんどんもミカン箱ていどに小さく自粛はしたが各家を回り祝儀をもらってあるくなど自粛もかけ声だけにおわり各地区責任者の反省が望まれている。」（『富山新聞』1962.6.14）

このように，自粛運動の成果は限定的であったとはいえ，1962年の出町地区からは行燈が姿を消した。続く1963，1964年には次の記事がある。

「例年なら福野の夜高あんどんをまねた高さ六メートルもあるだし行灯を地区ごとにつくって，若者たちがかつぎまわっていたがこの行事は経費がかかるうえ，こどもたちに与える影響もよくないため数年前から自粛を申し合わせたので年々すたれる一方である。とくに盛んだった砺波市内でもことしはわずか数カ所でみられたていど。」（『北日本新聞』1963.6.12）

「情緒あるこの農村の年中行事もすたれていくようだ。電線にとどくような高い車につけた飾りあんどんが田楽あんどんにかこまれてせまい農道をねる風景はことしはすっかりかげをひそめた。出町中学校生徒会が校外班を通じて調べたところによると校下三十数部落のうちことしあんどんを出したのはわずか十八部落，しかもスケールは小規模になり，田楽あんどんだけですますというのが多くなり，飾りあんどんの豪華なものはひとつもなかった。はりめぐらされた有線放送の線がじゃましそのうえ児童数の減少で大きなものが作れず，運営能力がなくなったというのが実情。」（『北日本新聞』1964.6.11）

このように，自粛の影響に加え，有線放送の線が邪魔になっているという指摘もあった。そして1965，1966年は夜高行燈の記事がない。1960年から66年の7年間が，出町における夜高行燈中断期と考えられる。

（5）復活と審査表彰制度の確立

ところが1967年になると，夜高行燈復活の記事が登場する。

「穀倉砺波の田祭りは，十，十一日の夜，七本の夜高あんどんが，八年ぶりに市街地をねり歩きことしの豊作を願った。十日夜は，ツユ本番の雨もよう。干害に悩む農家の人たちにとっては，まさに恵まれた田祭り。その中を，そろいのハッピを着たこどもたちが，カケ声も

勇ましく高さ四,五メートルもある大あんどんを太鼓にあわせて引き回した。」（『富山新聞』1967.6.12）

こうして1967年には夜高行燈が復活し，7町の行燈が市街地を練り歩いた。

続く1968年には6つの町（『富山新聞』1968.6.10）。1969年は町名がわからないが7本（『北日本新聞』1969.6.10）もしくは8本（『富山新聞』1969.6.12），1970年も8本（『北日本新聞』1970.6.12），1971年は8本（『北日本新聞』1971.6.12）もしくは12本（『富山新聞』1971.6.12），1973年には13町から14本になる（『北日本新聞』1973.6.12）。そして1974年には12町から24本（『北日本新聞』1974.6.12），旧出町18町内から21本（『富山新聞』1974.6.12）と，新聞により数に違いはあるものの，総数が倍近くに増え，小行燈を含めて複数の行燈を出す町内が増えた。1975年は10町から20本（『北日本新聞』1975.6.12），1976年には大小22本（『北日本新聞』1976.6.12）とある。

1977年になると，出町地区だけでなく，太郎丸，深江など郊外からの参加が始まる（『北日本新聞』1977.6.9）。郊外からの参加を認めたことが,祭りをさらに発展させる契機になったと思われる。こうして，参加町がほぼ現状に近いものになっていく。

行燈が8年ぶりに復活した1967年の記事には，夜高行燈コンクールの結果も載っており，市長賞，商工会議所会頭賞，商店会理事長賞，努力賞の記載がある（『富山新聞』1967.6.12）。賞に市長，商工会議所会頭，商店会理事長の名があることから，3団体の公認であったことは確かである。

1972年になると，審査員に市長，駅長，新聞社支社長だけでなく，警察署長も加わっている（『北日本新聞』1972.6.12）。1973，74年も審査結果が翌日の新聞に載っている。1975年には，大行燈と小行燈に分けて審査・表彰するという形が出来上がる（『北日本新聞』1975.6.12）。以後，賞の数には増減があるものの，現在の形式がこの時点で確立したと見ることができる。

（6）競技化

このように砺波の田祭は，1967年の復活後，参加町や行燈の数が増えていった。しかし行燈の運行に際しては，順路や時刻を事前に調整せず，各町が独自に運行していた。このため，いつどこで喧嘩が起こるかまったく予想がつかず，常に緊張感があったという。特に，左側通行ですれ違う際に横からぶつかることがあるため，行燈の右側が危険であったという。

このため，喧嘩を防止するための努力も早くから行われていたようである。新聞記事を見ると，早くも1959年に申しあわせをした記事がある。

「十,十一両日砺波地方でくりひろげられる田祭り行事の夜高あんどんの引回しについて砺波商工会議所，砺波市商店会長，同町内会長，砺波署ら関係者が二日消防会館に集まり協議し，次のことを申し合わせた。一.引回しを円滑に運営するため運営委員会を設ける。一.参加者は中学生以下または砺波商店会の検印のある腕章をつけた者（各町二十人）に限ること。一.あんどんは左側通行として，交差点に止まらぬこと。一.引回し中あんどんを前方または後方に傾斜（戦闘体制）をとらないこと。一.裁許は白地に赤線入の腕章をつけること。一.あんどんの高さは五・三メートル，練棒の長さは六メートル以内，横棒の長さは二メートルとし，ワイヤー,ロープを使用しないこと。一.現場では警察の指示ある場合にそれに従うよう。一.引

回し時間は午前零時までとする。」（『富山新聞』1959.6.9夕刊）

復活後の1970年にも，事前に町内代表を集めて申し合わせがなされた。

「関係各町代表が商工会議所で打合せ会を開き，酒飲み引き回し絶対禁止など次の厳守事項を申し合わせた。夜高あんどんの引き回しは，両日とも午後十一時までに各町内へ帰るコースを取り，おそくとも午前零時には解散する。あんどんの大きさは高さ四・五メートル，長さ八メートル以内とする。引き手は，中学生以下は午後九時までに帰宅，一般の引き回しも裁許または副裁許（二人）の統制指示に従い，関係者以外の引き回しは絶対許さない。あんどんのすれ違いは左側通行，交差点付近での休憩には，あんどんの距離を五メートル以上保ち，特に本町交差点の通過には警察官の指示に従う。飲酒引き回しやぶつけ合い，けんかなど周囲に迷惑または不安を感じさせる行為は絶対行わない。」（『富山新聞』1970.6.9）

ここでは，終了時刻，行燈の大きさ，曳き手，すれ違い方法，飲酒禁止などを決めている。ぶつけ合いは「絶対行わない」と申し合わせたが，戦後の新聞にはここまでぶつけ合いの記事がなく，実態はわからない。また，禁止の効果も不明である。1977年には，「ときには相手のあんどんとぶっつけ合う『けんかあんどん』（二日目の夜）として見物客の関心を集めている」（『北日本新聞』1977.6.9），「夜高の面白さはこのケンカにある。美しく飾ったのを見るのも楽しみかも知れない。だから第一日は街を練り歩く。第二日はケンカだ」（『となみ新聞』1977.6.15）という記事がある。6月10日は練り回しと審査，11日にぶつけ合いが恒例になっていたようである。

そして1980年頃に行事が大きく変わる。突き合わせの場所，時間，突き合わせ相手を事前に決めたのである。突き合わせの「対戦表」が残るのは1980年からで，それによると市内2カ所（本町四つ角と富山相互銀行前）で合計11回の「対戦」を行った。

突き合わせの方法は，事前に決めた場所と時間に，相手と離れて向かい合い，ホイッスルの合図で走り出し，助走をつけて行燈を正面衝突させ押し合うというものである。勝敗の基準はないが，当事者の意識では，相手を押して下がらせれば勝ちと考えられた。1回の対戦の制限時間が20分と決められ，時間が来たら状況にかかわらず終了となった。

注意事項として，1982年の組み合わせ表には次の「規定」が記載されている。

「突き合せ押し合に関する規定

1. 突き合せ押し合の場所は，本町四ツ角（A地点）と，富山相互銀行前（B地点）の2箇所だけとする。
2. 突き合せ押し合は，下記組み合せ表の通りとし，組み合せ表以外の突き合せ押し合は一切禁止する。
3. 突き合せ押し合は，必ず頭を下げて行うこととする。
4. 20分の時間制限がきたなら，勝敗関係なくすみやかに別れることとする。
5. 左側通行，待機を厳守する。
6. 突き合せ押し合は，開始前に互いの裁許が話し合，ルールを守り正正堂堂と行うこととする」

ここで「頭を下げて行う」というのは，行燈の先に突き出した練り棒を斜め上に上げず，水平のままぶつかるよう求めたものである。この場合，練り棒同士がぶつかり，突き合わせはまさに水平

方向の押し合いになる（現在は斜め上に上げる戦法も認められている）。

突き合わせの場所と時間を固定したことにより，警察は警備がしやすくなった。また観光客にとっても，大行燈の迫力のあるぶつかり合いを「観戦」することが容易になった。このようにして「競技」形式の突き合わせが定着した結果，一定の安全が確保されているため，参加者は突き合わせに集中することができ，大事故も起きてはいない。そして迫力ある突き合わせを見に訪れる観光客も増加していった。

このように「競技化」した結果，参加町内のグループ化が起こっていった。1980 年に大行燈の突き合わせに参加したのは 13 町で，各町が 1 ～ 3 回の突き合わせを行った。その際に，13 町が東西南北の 4 グループに分かれ，「東西」対「南北」の間で突き合わせが行われたのである。このグループはその後も引き継がれ，すべての突き合わせがこの組み合わせに拠っている。

（7）組織の整備

復活から約 10 年が経過した時点の新聞記事に「特異なことはこの行事に，未だに主催者がいない」（『となみ新聞』1978.7.1）とあるように，行事には全体を統括する組織がなかった。そこで組織化に向けた動きが起き始めた。1980 年頃に「砺波市夜高行灯曳き回し実行委員会」という主催団体が登場し，これが 1983 年に，現在の主催団体である「砺波夜高振興会」の結成につながっていく。この組織は，祭礼の主催団体として，祭礼の運営と振興，観光の発展などを目的に，出町地区の町が集まる出町自治振興会，商工会議所，観光協会，商店会，市観光課，行燈を出す町などが参加して結成された。会長には出町自治振興会長が就任し，事務局を観光協会に置き，行事全体を統括する組織となった。そして，参加町はそれぞれ曳き回し実行委員会を組織して，砺波夜高振興会の指導と指示を受ける形になった。

この組織の特徴は，参加町を地区等によって限定せず，希望する町には門戸を開いていることである。新規参入や脱退の自由を認めているため，出町地区だけでなく郊外の町も加わっている。このため，将来の発展の可能性を秘めた組織になっている。

さらに，行事の名称が「となみ夜高まつり」となった。田祭から「夜高まつり」への変更[20]は，もはや田植え後の休みや豊作祈願の祭りではなく，行燈の制作，運行，突き合わせそのものが祭りの目的となったことの現れである。

（8）近隣の祭礼との比較

砺波で祭礼が中断した 1960 年代には，近隣でも同様の動きがあった。

まず，砺波と同じく田祭から発展した夜高行燈を行っている庄川と津沢でも，ほぼ同じ時期に行燈の中断を経験している。庄川では，『庄川町史』に，「このように盛況であった夜高行燈も，三〇年ごろからだんだん下降線をたどった。時代の推移とともに製作の中心をなす青年の勤務に支障を来し，また自動車激増のために町内の練り回りにも問題が生じ，三七年には全くすたれてしまった。」［庄川町史編さん委員会　1975：.930］と，1962 年にすたれたと書かれている。新聞記事にも「庄川町観光協会，商工会，富山新聞社共催の庄川観光まつりはことしも九, 十の両日次の日程で催す。ことしは夜高あんどん町ねりをとりやめ約二十五万円で舟戸ダム付近で花火大会をやり県下の

トップをきって初夏の夜空をはなやかにいろどる。」（『富山新聞』1962.6.3）とあり，行燈から花火へ転換したと書かれている。「その後，数回にわたって，観光祭行事の一環として復活が話題になり，四七年には金屋の清水町内が試み，四八年には金屋・青島地区の町内から大行燈が六台，中小行燈が十数台繰り出し，久しぶりににぎわいをみせた。」［庄川町史編さん委員会　1975：.930］とあることから，復活は1972年に1町内，1973年に完全復活であった。10年間の中断期間があったことがわかる。

津沢では，1958，1959年に行われたことは新聞記事から確認できるが，中断年ははっきりしない。復活は，「小矢部市津沢でも十数年ぶりに今年の豊作を祈る田祭りの夜高あんどんが復活，十日十一日夜，大小14本のあんどんが町並みを練り歩き，オールドファンを喜ばせた。」（『北日本新聞』1974.6.12）とあって，1974年に復活した。

さらに，井波町（現，南砺市）では，現在では田祭が行われていないが，1961年に次の記事があった。「農村の風物詩として親しまれてきた田祭りを時代にあった簡素で合理的なものにしようと井波町社会福祉協議会が指導にのりだした。田祭りは夜の行事なのでこどもが夜遊びするきっかけになったり，また学校で勉強中にいねむりするなど弊害が多い。指導の要点は低学年児童を作業に使わない。作業時間は午後九時までにきりあげる。寄付を強要しない。経費は児童育成委員会，町内会でまかなうなどで，まず田祭り行事の簡素化をねらい，さらにこれをこども大会などの新しい行事にきりかえていく方針をとっている。大会の内容はおとなとこどもといっしょになって童話，紙芝居，合唱，器楽，手品，遊戯など一時間程度楽しむもの。」（『富山新聞』1961.5.26）。この記事からすると，1960年までは田祭が行われていたが，社会福祉協議会の指導により別の行事に切り替えたというのだ。この時に田祭がなくなった可能性がある。

次に，富山県内に分布する「喧嘩祭」，すなわち行燈や山車をぶつける祭礼を見ると，戦後に死亡事故が相次いだ。

新聞記事によれば，まず1950年に高岡市伏木の伏木曳山祭で，町内曳き回しと祭礼で各1名，合計2名が死亡した。翌1951年には，福野夜高祭で，行燈にはさまれて2名が死亡した。1954年には，富山市岩瀬の曳山車祭で，見物の少女が死亡した。1957年には，伏木曳山祭で見物客が死亡した。1961年にも伏木曳山祭で2名が死亡した。

こうしたこともあって，特に1960年代に入ると，警察による事故防止の働きかけが祭礼に影響を与え始める。1962年の伏木では，祭礼の前に次の記事があった。「ミナト伏木の“けんか山車”で有名な高岡市伏木神社の春祭りは，十五日豪快な気風をもった六本の山車が練り回るが，伏木署では昨年の祭りで引き子二人が山車の下敷きになって死亡しているだけにことしは「山車のぶつけあい」を禁ずると強い警告をだすとともにこのほど全山車町の関係者を集めて打合せ会をひらき，ことしこそ事故をなくし楽しい祭りにしようとつぎのことを申し合わせた。山車は，交差点，バス停留場，踏切，消防署，消火せん，貯水池，官公署などの近くに止めることを禁ずる。交通の妨害になる場所は観衆と関係なく移動を命ずる。また夜間は危険を防ぐため，標識灯をつけて山車の位置をわかるようにする。事故が発生した場合その責任と義務を履行するため山車総代は契約書を提出し，許可条件をはじめ危険防止の指示警告には絶対にしたがうこと。引き子には，他町内の引き子や未経験者，未成年者とくに高校生に引かせてはならない。また引き子は酒をのんだり，雑談な

どせず注意深く引き，総代，警察官の指示に従うこと。許可順路や時間を守り，終了三十分前に引き終わるよう計画する。また酒に酔った者や関係者以外は山車に近づけないようにし，歩行者，見物人に危険のないようじゅうぶん注意する。一般家庭では家を留守にしないこと。」（『富山新聞』1962.5.12（夕））。実際の祭りも，「ことしは事故防止で自粛を申し合わせていただけに秩序正しいひき山ぶりだった。なお夜は午後七時からやく二百個の提灯にいろどられた山車が市内をねり回る。」（『北日本新聞』1962.5.16），「昨年は山車のぶっつけあいで死者二人を出したのでことしは手あらいだしのぶっつけ合いはひかえた。」（『富山新聞』1962.5.17）とあることから，事故のないよう気を配った祭りであったようである。

また，伏木では，山車のぶつけ合いを，場所と時間を決めて行うように変わっていった。伏木では元々，6 町が山車を曳き，随時，随所で「かっちゃい」と呼ばれるぶつけ合いを行っていた。ところが危険であることと，観光客へのアピールもあって，1963 年から「かっちゃい」の場所を 4 カ所に決めたという［直　1968］。

富山市岩瀬でも，警察の働きかけにより参加町が減ったという。「ケンカ引き山で有名な富山市，岩瀬諏訪神社の春まつりは十七，十八日の両日全町あげて盛大にくりひろげられた。数年前までは六，七本の引き山が港町特有のあらあらしい気風で引き山と引き山がぶつかりあい，興奮を盛りあげるのだが，昨年あたりから白山町，荒木町，福来町，浦町の四本だけでそれも事故防止のため岩瀬警察署が十六日朝引き山関係者を呼んで時間を制限し，酒をのんでの引き山などの厳守を要望したので事故なく，情緒豊かにはやしの音とともに全町を引き回った。」（『富山新聞』1963.5.19）。このように，警察から事故防止策として，時間制限，飲酒禁止等の要望があり，参加町が減少し，いったんは穏やかな祭礼になった。

さらに，富山市では 1964 年に，山王祭への子どもの参加を制限する記事があった。山王祭とは，日枝神社の祭礼で，神輿渡御と多くの露店が出ることで知られる富山市最大の祭礼である。「総曲輪小学校校下生活指導協議会は二十八日，総曲輪小学校にこども会の代表や校下補導委員，PTA，職員など百人が集まって六月一日からの山王祭に対し，こどもたちが規律ある生活を送るように次のことを決めた。1 外出に際しては父兄同伴で出かけること。2 夜間の外出は九時までとする。3 正しい服装で出かけること。4 むやみに露店の品物を買わないこと。5 暴飲暴食をしないこと。6 露店で売っているものはそこで食べないこと。7 サーカスの動物のそばには近寄らないこと。8 自転車で日枝神社に行かないこと。9 知らない人に何か尋ねられたら臨機応変にする。10 何回も日枝神社にゆかない。11 でたらめの遊びは絶対にしない。また三十一日から二日までは，先生たちが街頭補導に出かけ，祭礼でともすればゆるみがちなこどもたちの気持ちを引き締め，家庭中心の祭礼の過ごし方をすることになった。」（『富山新聞』1964.6.1）。ここでは，祭礼が子どもに悪影響を与えるという観点から，教育者が子どもの行動を制限する指針を決めている。このように，1960 年頃には富山県内各地で祭礼の規制が行われ，一時的には祭礼に影響を与えたのである。

（9）変化の特徴

となみ夜高まつりは 1960 年から 7 年間中断した。富山県では同じ頃，「喧嘩祭」として知られる祭礼に対し，警察から「喧嘩」の禁止，時間厳守，飲酒禁止等の指導があり，内容に影響を与え

た。またPTAなどから，子どもの教育上良くないと批判され，夜高行燈は砺波をはじめ中断に追い込まれた。しかし，1967年頃に祭礼が復活し，行政の関与を強めて，実行委員会組織が確立した。1980年頃からは日時，場所，対戦相手，ルールを決めてぶつけるという「競技化」の方向に変化した。周辺地域でも同様の傾向が見られた。いずれも事故防止を強調し，対策を具体化しながら，祭礼として発展していった。

結論

（1）祭礼の衰退要因

これまで3つの祭礼について，高度成長期の変化を紹介してきた。次に，これらを比較し（表2），高度成長期の祭礼の変化をまとめていきたい。

3つの祭礼の共通点として，1960年代前半頃に「衰退期」があり，1960年代後半から1970年代に「復興期」が訪れるという大まかな傾向があるのではないだろうか。

そこで次に，祭礼の衰退を招いた要因を推測してみたい。

まず，高度成長期には，経済効率を重視し，無駄を省く考え方が広く行き渡った。こうした思考を広めたものの中に生活改善諸事業があった。なかでも祭礼の支出を浪費として批判し，祭礼自体の廃止や縮小を促した運動として，新生活運動がある。

新生活運動とは，1955年に設立された新生活運動協会が推進した事業である。全国的な事業として推進されたものの，直接の担い手をもたなかったため，公民館活動との結びつきが強まった。主な活動内容を，田中宣一は次の5点にまとめている。

A. 公衆道徳の高揚，助け合い運動，健全娯楽の振興
B. 冠婚葬祭の簡素化，むだの排除，貯蓄と家計の合理化，時間励行
C. 生活行事・慣習の改善，迷信因習の打破
D. 衣食住の改善，保健衛生の改善，蚊とハエをなくす運動
E. 家族計画　［田中　2011］

このうちBでは冠婚葬祭の簡素化と貯蓄奨励が多く実施された。新生活運動協会の機関誌『新生活通信』では，公民館結婚式の奨励と実践例，結納廃止，花嫁衣装の共同利用，高額な香典と香典返しの反省，等が紹介されている。Cでは，伝統行事や地域の慣行における陋習と思われるものが対象になり，特に祭りの廃止や簡素化が実施された。『新生活通信』には，祭りの廃止（千葉県館山市河崎地区，『新生活通信』1956.8.10，徳島県羽ノ浦町，『新生活通信』1957.7.10），町全体の祭り日の統一（鳥取県青谷町，山形県平田村『新生活通信』1956.8.10，福島県会津坂下町，『新生活通信』1957.9.10），祭りの簡素化（長崎県小浜町，『新生活通信』1956.8.10，和歌山県田辺市稲成町，『新生活通信』1957.7.10）などの記事が見られる。また富山県では，新生活運動の影響で，獅子舞の簡素化（新湊市，『富山新聞』1961.5.15，石動町，『富山新聞』1961.6.6）が行われたという。ここでは，祭礼における「浪費」が批判され，特に，多額の祝儀を集めて飲食に費やす点の改善が求められた。和歌山県田辺市稲成町で使われたという「祭りの合理化」という表現（『新生活通信』

表２　高度成長期における３つの祭礼の出来事

西暦	元号	青森ねぶた祭	野田七夕まつり	となみ夜高まつり
1946	昭和 21			
1947	昭和 22	青森市復興港まつり開催		
1948	昭和 23	「市制施行五十周年港まつり」として開催。海上運行，花火大会始まる。審査制度始まる（優秀，優良，佳良の３段階）		
1949	昭和 24			出町三百年祭に合わせ開催
1950	昭和 25		上町で１週間七夕と福引	（伏木曳山祭で２人死亡）
1951	昭和 26		（平塚，福生で七夕祭開始。関東各地で七夕祭り始まる）	各地で特に盛大 （福野夜高祭で２人死亡）
1952	昭和 27		本町会で七夕祭の売出しと竹飾り	行燈コンクール実施
1953	昭和 28	大人ねぶたと子供ねぶたを区別し合同運行日を分ける（子供が 3,4 日，大人が 6,7 日）	竹飾り審査あり	高さ制限 12 尺
1954	昭和 29	新町にネオンでき高さ 5.4m が上限になる	審査あり最優秀賞は知事賞 （茂原で七夕祭開始）	高さ制限 14 尺。行燈 40 本 （岩瀬曳山車祭で１人死亡）
1955	昭和 30	開港 50 周年記念と銘打って実施。日程を旧暦から新暦に改め，８月３～７日とする。子供ねぶたの祝儀が問題化。日専連全国大会（札幌），函館港祭りに遠征	第三回コンクール （千葉で七夕祭開始）	
1956	昭和 31			
1957	昭和 32	日専連全国大会（仙台）に遠征。横長の「シネスコ型」続出，最大で幅 28 尺	むらさき音頭できる	（伏木曳山祭で１人死亡）
1958	昭和 33	「青森ねぶた祭」と改称。日専連東北大会開催のパレードにねぶた参加。審査廃止	観光協会と商連の主催	
1959	昭和 34	大型ねぶた 11 台（戦後最低）		関係者が事前申し合わせ。高さ制限 5.3m
1960	昭和 35	大型ねぶた 11 台（戦後最低）	ミス野田選出	（行燈出ず？）（津沢でこの頃行燈中断）
1961	昭和 36	県庁参入		（行燈出ず？）（井波で田祭簡素化） （伏木曳山祭で２人死亡）
1962	昭和 37	青森観光協会，ねぶた祭最重点の事業計画を定める。観光宣伝キャラバン開始。国鉄が東北三大祭周遊団募集。８月５日にも合同運行（５日間毎日合同運行）。審査復活，田村磨賞（最優秀賞）のみ		PTA が自粛運動。行燈出ず （庄川観光祭で行燈やめ花火）
1963	昭和 38	青森市無形文化財に指定。地域を母体とする大型ねぶた激減（前年の７から３へ）	商議所，観光協会，商連で実行委員会結成	行燈出ず
1964	昭和 39	観光協会が統一ゆかた作成，一般に販売。国鉄，マルハ参入		行燈出ず
1965	昭和 40	日立参入	（この頃，各地で七夕祭り終了）	行燈出ず
1966	昭和 41			行燈出ず
1967	昭和 42	初日と２日目，大型ねぶた出ず。子供ねぶたわずか４台。奨励賞を制定		行燈復活「8 年ぶり市街地を練り歩く」（富山新聞）
1968	昭和 43	初日から大型ねぶたが合同運行に加わり，大型ねぶたが５日間合同運行。ハネト参加を一般開放	（船橋産業まつり開始）	
1969	昭和 44	県庁前歩道橋設置（高さ 5.2m）。囃子賞を制定（2 年中断後 1972 から恒例化）		
1970	昭和 45	日本万国博覧会に登場	日程を４日間から３日間に縮小	関係者が事前申し合わせ。1 万人近い人出
1971	昭和 46	「日本の祭り」に登場（1984 まで）。奨励賞を知事賞に改める	（柏商業まつり開始）	
1972	昭和 47	人出 200 万人突破。ミスねぶたコンテスト開始	市主催。野田盆踊り歌でき踊りパレード開始	1 万人の見物客。行燈に車輪を入れる（庄川で行燈復活）
1973	昭和 48	海上運行中止	市報で回数数え始める	（福野夜高行燈が大銀座まつりに遠征）
1974	昭和 49		野田小唄できる	（津沢で行燈復活）
1975	昭和 50		15 万人の人出	
1976	昭和 51	ニースのカーニバルに遠征		
1977	昭和 52	主催「青森ねぶた祭実行委員会」。「ねぶたの里」オープン		24 本，郊外からも参加，けんかあんどんの記載
1978	昭和 53	ブラジル移民七十年祭・第五回東洋祭り（サンパウロ）に遠征		反省会で組織整備の必要性を議論
1979	昭和 54	日程１日増やし８月２～７日	全国３位の規模を自称	夜高保存会できる
1980	昭和 55	国の重要無形民俗文化財に指定。人出 300 万人突破。ハワイ桜まつり，台湾国慶節に遠征	市と実行委の共催 野田おどりできる	「となみ夜高まつり」の表記あり。この年以降の対戦表が現存。この頃，喧嘩や審査方法を決める
1981	昭和 56	海上運行復活。１日に前夜祭開始	市と実行委の共催	
1982	昭和 57	（東北新幹線盛岡まで開業）	３日雨で中止	
1983	昭和 58		27 万 5,000 人の人出 市報の他にリーフレット配布	砺波市夜高行灯曳き回し実行委員会主催。砺波夜高振興会設立
1984	昭和 59		27 万 6,000 人の人出	28 本。見物客 1 万 5,000
1985	昭和 60		25 万人の人出	

1957.7.10）は，当時の事情を良く表すものであろう。また「学業の妨げ」とする学校関係者，事故防止を強調する警察関係者の主張もあって，祭礼が衰退したものと思われる。

今回の調査では，新生活運動が3つの祭礼に与えた具体的影響を明らかにすることはできなかった。しかし，特に砺波における夜高行燈の中断については，近隣の新湊市や石動町で獅子舞を簡素化したことから推測すると，影響は無視できないのではないか。今後の課題として，引き続き調査を進めたい。

（2）祭礼の復興要因

1970年前後に祭礼が復活する要因については，さまざまな理由が考えられるが，まだ体系的に研究がなされてはいない。ここでもいくつかの要因を列挙するにとどめる。

まず，この時期には祭礼に対してプラスの評価がなされ始める。単に旧態依然とした悪習ではなく，過去から伝えられた「伝統」として価値を見いだす転換が起きた。この転換を，祭礼の「文化化」と表現することができるのではないだろうか。

こうした動きとして，この時期に祭礼が文化財指定されたことを挙げておきたい。国の文化財指定[21]の最も早い例は，1959年，日立風流物の「重要民俗資料」指定である［日立風流物記録編さん委員会　1976］。続く1960年には高岡御車山，高山祭屋台，播磨総社「三ツ山」ひな型の3つ，1962年には秩父祭屋台，祇園祭山鉾の2つが重要民俗資料の指定を受けた。有形の民俗資料としての祭礼の指定は，ここでひとまず終わる。

その後1975年に文化財保護法が改正され[22]，重要無形民俗文化財の制度が出来上がった。これ以後，祭礼も重要無形民俗文化財に指定されることになる。1977年の日立風流物を皮切りに，1979年には烏山の山あげ行事，秩父祭の屋台行事，高岡御車山祭の御車山行事，高山祭の屋台行事，長浜曳山祭の曳山行事，京都祇園祭の山鉾行事，博多祇園山笠行事，以上7つの祭礼が指定された。そして1980年には，青森のねぶたなど9つの祭礼が指定された。以後，ほぼ毎年のように各地の祭礼が指定を受け，「文化財」になっていくのである。

また，当時，国を挙げて行われた大規模イベントにも祭礼が取り入れられた。1970年に開催された日本万国博覧会では，「日本の祭り」という催し物があり，全国から59の祭り・民俗芸能が登場した。また，1971年から84年まで，毎年8月に東京・神宮外苑で「日本の祭り」と題するイベントが開催され，全国から毎年12の祭りが出場した。青森ねぶた祭はこうしたイベントの常連であった。こうした晴れ舞台への登場で，特定地域を表象する存在として祭礼が認知されるようになっていった。

こうした動きの背景として，根木昭らは，1980年に大平正芳総理大臣の委嘱を受けた政策委員会「文化の時代研究グループ」の報告『文化の時代』が，この標語を世間一般に流布させたこと，その背景には，高度経済成長期の経済至上主義から二度の石油ショックを経て安定成長に転じた時期に，物質的豊かさだけでなく「生活の質」の向上が求められ，その中核となるものが「文化」に他ならなかったことを指摘している［根木他　1996］。

次に，祭礼の「観光化」が挙げられる。これは本論文で取り上げた青森ねぶた祭と仙台七夕祭に顕著に見られるように，1962年に「東北三大祭」を巡る周遊ツアーが開始されたことをきっかけ

に，関東からの観光客が増加した。青森ねぶた祭では観光客のための有料観覧席も設置された。七夕祭りの全国的普及も，観光客誘致を意識していたことは言うまでもない。すなわち，祭礼は観光客を吸引する観光資源となりうるという認識が一般化するのである。一方，七夕祭りの多くは，高度成長期の終わり頃には観光資源として評価されなくなり幕を閉じたが，一部は市民祭の形式を取り，パレードを取り入れることで生き残った。

観光化に対応するためには，市役所や商工会議所が運営組織に加わり，予算を立案して行事を運営する仕組みが必要になる。これは祭礼の「組織化」と呼ぶことができるだろう。行政，警察，交通機関などが，広報，観光客への対応，輸送，雑踏警備，交通規制，清掃といった，日常業務と同質の業務を行う必要性が生じてくるのである。今回取り上げた祭礼においても，野田では市役所が共催団体に加わった。砺波では実行委員会の組織が確立した。

さらに，祭礼の「健全化」も指摘しうる。となみ夜高まつりなど富山県の祭礼に見られたように，警察から事故防止を強く求められ，飲酒の禁止や行燈の大きさが制限された。その際に，興奮しがちな若者を秩序立てて祭礼に吸収する仕組みとして，日時，場所，対戦相手，ルールを決めてぶつけるという「競技化」を計った。

以上，復興要因に見られる特徴として４つの要素を挙げた。今後，他の祭礼を検討する際の指標とするとともに，より精緻な分析を心がけたいと考えている。

註

（１）――筆者は青森ねぶた祭を 1997 年から調査し，現在も調査を継続している。研究成果として［阿南 2000］［阿南 2003］［阿南 2011b］などを発表している。青森市から刊行された［宮田・小松編 2016］は，2000 年に発行された同書の増補版であるが，筆者もそれまでの研究成果を踏まえ，初版に大幅に加筆した論考［阿南 2016］を発表している。本章はそれらを踏まえている。

（２）――本節は［阿南 2016］に掲載したデータを使用しているが，分類方法を改めた。

（３）――私は戦後に出されたねぶたの団体名，題名，制作者等を,「戦後大型ねぶた一覧」としてまとめた。これは［宮田・小松編 2016］に収録されている。本稿の記載はこの一覧表に基づいている。

（４）――経費の高額化については今回は触れないが,［阿南 2016］に要点をまとめている。

（５）――本節は［阿南 2016］に基づいている。

（６）――「東北三大祭」の成立と展開については［阿南 2011b］を参照。

（７）――本節は［阿南 2003］を踏まえて改稿したものである。

（８）――ねぶたの遠征については［阿南 2016］に詳しい。

（９）――本章は［阿南 2011a］で紹介した資料を用いて再構成している。

(10)――近代の仙台七夕まつりの研究は，近江恵美子による一連の研究（［近江 2007］など），高橋綾子・初沢敏生による研究［高橋・初沢 2003］などがある。なお，私もこれらの先行研究を踏まえた論考を発表している［阿南 2009］。

(11)――このため仙台七夕まつりには各地からの視察が相次いだ。1951 年には水戸，日立，前橋，平塚，釜石などの各商工会議所から約 300 名（『河北新報』1951.8.7），1952 年には土浦，平塚，横須賀，水戸，会津若松，八戸，清水，四日市，神戸の９市から視察団が来仙した（『河北新報』1952.8.4）。また，1955 年には 20 余の商工会議所から，七夕飾りの作り方，経費などの照会があった（『河北新報』1955.7.23）。

(12)――例えば阿佐谷［阿佐谷商店街振興組合　2003］，橋本［橋本七夕まつり記念誌委員会　2004］では，50 周年記念にあたり開始理由を調査したが，明確な理由にたどり着けなかったようである。

(13)――茂原は「茂原市榎町商店会初の試みである七夕祭りは四日からにぎやかに幕をあけた」（『朝日新聞千葉版（南部）』1954.7.5）など同年７月の各紙に「初の試み」の記事がある。これが好評であったため 1955 年に全市的

に実施した。現在ではこれを第1回と数えている（『広報もばら』1994.7.5）。千葉は［千葉商工会議所 1991］が1955年開始としている。市原郡南荘町牛久は，開始時期は不明だが1955年8月7日と8日の『千葉新聞』に記事がある。旭は1955年を開始年としている［旭の風土と文化編集委員会 1993］。木更津は1962年に「このまつりは七回目」という記事があり，逆算すると1956年開始になる（『千葉日報』1962.7.7）。以下，開始時期は不明だが，松戸は『毎日新聞千葉版（三）』1959年8月1日，銚子は『毎日新聞千葉版（二）』1959年8月6日，船橋は『毎日新聞千葉版（三）』1959年8月8日が新聞での初出である。市川市若宮地区は『千葉日報』1964年8月7日に「若宮たなばた五周年」とあることから1960年開始と推測される。

(14)――少し後になるが，1995年の参加団体と人数を［阿南 2011a］で紹介している。

(15)――開始に至る過程で，主催者は仙台と平塚の七夕まつりを視察して参考にしたという［柏まつり実行委員会 1998］。七夕まつりと市民祭の類似性がうかがえるエピソードである。

(16)――人数は各年の『野田市報』9月1日号に掲載されている。

(17)――私はとなみ夜高まつりを2011年から調査し，現在も調査を継続している。本章1～7節は［阿南 2014］を基に，その後の調査を踏まえて補足したものである。

(18)――砺波平野の夜高行燈に関する先行研究には次のものがある。1990年頃までは，神社祭礼である南砺市福野の「福野夜高祭」に研究が集中した［長岡 1970］［佐伯 1976］。一方，田祭として行われてきた地域については，市町村史での紹介として［庄川町史編さん委員会 1975］が目立つ程度であった。転機になったのが［宇野 1997］である。これは富山県と石川県の曳山祭の丹念な実態調査と分析である。同書では4つの祭礼を「夜高行燈の祭り」という項にまとめて紹介しただけでなく，田祭の小行燈から夜高行燈への行燈の発展仮説を提示した。これを受けて，夜高祭の記述が市町村史などに増加する。福野では［佐伯 2000］のほか，地元関係者が記念誌を発行した［福野夜高保存会 2003］。砺波では［砺波市五十年史編纂委員会 2004］が都市部の夜高祭を紹介した。津沢については，［小矢部市史編集委員会 2002］が当時の様子を紹介した。また，富山大学文化人類学教室も調査報告書を刊行した［富山大学人文学部文化人類学研究室 2011］。

(19)――この14町のほか，2014年には鹿島が審査に加わり，2015年には突き合わせに初参加した。しかしまだ3つのグループには加わってはいない。鹿島の参加に伴い，対戦数も増加している。

(20)――この名は1979年に使われ始めているが，一般化され「田祭」の名が消えるのは1980年からのようである。

(21)――ここで紹介する文化財の指定年については，「国指定文化財等データベース」に拠った。http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.html（2017年4月20日閲覧）

(22)――1975年の文化財保護法改正については［岩本 1998］［菊地 1999］などの研究がある。

文献

青森観光協会，1977『青森観光協会二十五年史』青森観光協会
阿佐谷商店街振興組合，2003『阿佐谷七夕まつり　五〇周年特別記念誌』阿佐谷商店街振興組合
旭の風土と文化編集委員会，1993『市制四十周年記念誌　旭の風土と文化』旭市
阿南 透，2000「青森ねぶたとカラスハネト」日本生活学会編『祝祭の一〇〇年』ドメス出版
阿南 透，2003「青森ねぶたの現代的変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』103
阿南 透，2009「都市祭礼『仙台七夕まつり』の成立と変容」『情報と社会―江戸川大学紀要』
阿南 透，2011a「野田の七夕まつり―商店街催事から市民祭へ」『野田市史研究』21
阿南 透，2011b「『東北三大祭』の成立と観光化」『観光研究』22-2
阿南 透，2014「『となみ夜高まつり』の成立」『江戸川大学紀要』24
阿南 透，2016「青森ねぶたの現代」宮田登・小松和彦編『青森ねぶた誌　増補版』青森市
稲垣甚作，2003「安城七夕まつりはこうして始まった」『日本の三大七夕―七夕「額」飾りの世界』安城市歴史博物館
岩本通弥，1998「民俗学と『民俗文化財』のあいだ―文化財保護法における『民俗』をめぐる問題点」『國學院雑誌』99-11
宇野 通，1997『加越能の曳山祭』能登印刷出版部

近江恵美子，2007『仙台七夕まつり　七夕七彩』風の時編集部
小矢部市史編集委員会，2002『小矢部市史―市制四十年史編』小矢部市
柏まつり実行委員会，1998『温故知新―柏まつりの歴史』柏まつり実行委員会
菊地 暁，1999「民俗文化財の誕生―祝宮静と 1975 年文化財保護法改正をめぐって」『歴史学研究』726
斎藤弘之，2003「安城七夕まつりの誕生とその原像―七夕「額」飾りの本質と昭和二〇年代の七夕ブーム」『日本の三大七夕―七夕「額」飾りの世界』安城市歴史博物館
佐伯安一，1976「福野の夜高と曳山」富山県教育委員会編『富山県の曳山』富山県郷土史会
佐伯安一，2000「福野夜高行灯と砺波平野の田祭り」『祝い絵』石川県立歴史博物館
佐藤三郎，1971「七夕祭りのはじめ」山崎繁雄編『ふっさっ子』第 2 集，武蔵書房
庄川町史編さん委員会，1975『庄川町史』上，庄川町
続出町のあゆみ編纂委員会編，2008『続出町のあゆみ―開町 350 年記念』続出町のあゆみ編纂委員会
高橋綾子・初沢敏生，2003「仙台七夕まつりの変容に関する一考察」『福島大学地域創造』15-1
田中宣一，2011「新生活運動と新生活運動協会」田中宣一編『暮らしの革命―戦後農村の生活改善事業と新生活運動』農文協
千葉商工会議所，1991『千葉商工会議所五十年史』千葉商工会議所
砺波市五十年史編纂委員会，2004『砺波市五十年史』砺波市
砺波市史編纂委員会，1965『砺波市史』砺波市役所
砺波市，2015『砺波市人口ビジョン』砺波市役所
富山大学人文学部文化人類学研究室，2011『富山県砺波市の生活文化と地域社会―地域社会の文化人類学的調査（20）』
直 為範，1968『伏木の山車』伏木文化会
長岡一忠，1970『福野の夜高あんどん雑考』長岡一忠
根木 昭・大橋敏博・神部一男，1996「1980 年代における『文化行政』の時代背景―『文化の時代』の社会的背景と『地方の時代』の文化的側面」『長岡技術科学大学研究報告』18
野田市企画財政部企画調整課，2016『野田市人口ビジョン』野田市
橋本七夕まつり記念誌委員会，2004『橋本七夕まつり五〇周年記念誌』橋本七夕まつり記念誌委員会
日立風流物記録編さん委員会，1976『日立風流物記録―歴史と記録』日立郷土芸能保存会
平塚七夕まつり実行委員会，1981『ひらつか七夕三十年のあゆみ』平塚七夕まつり実行委員会
福野夜高保存会，2003『万燈』福野夜高保存会
宮田 登・小松和彦編　2016『青森ねぶた誌　増補版』青森市（初版は 2000 年発行）
柳井雅也，2003「富山県砺波市における商業の変化について」『富大経済論集』49

（江戸川大学社会学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2017 年 1 月 20 日受付，2017 年 6 月 5 日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol.207 February 2018

Degeneration and Revival of City Festivals in the Rapid Economic Growth Period

ANAMI Toru

This paper clarifies the features of the transformation of city festivals by comparing how they were transformed during the rapid economic growth period and how the changes were related to local communities. This study analyzes the following three festivals: Aomori Nebuta Festival (Aomori City, Aomori Prefecture) ; Noda Tanabata Festival (Noda City, Chiba Prefecture) ; and Tonami Yotaka Festival (Tonami City, Toyama Prefecture). Aomori Nebuta Festival witnessed a decline in the number of Nebuta floats from local communities in the 1960s. It was, however, re-established as a popular tourist attraction in the 1970s, with a rebound increase in float numbers supported by the growing participation of public entities and private companies around Japan. The festival became so popular to be held in other cities around the country and designated as a cultural asset. Noda Tanabata Festival is one of the star festivals held in urban areas to pay tribute to the Legend of Tanabata. This type of festival was embraced by shopping districts around Japan between 1951 and 1955. Many were, however, discontinued in the late 1960s. Noda Tanabata Festival also needed to be refreshed to continue on. It was therefore transformed into an event similar to a community fair by introducing a parade in 1972. Tonami Yotaka Festival, like other fight festivals in Toyama Prefecture, was once abolished around 1960 due to criticism from the police, parent-teacher associations, and other organizations and revived in the late 1960s.

Thus, the festivals experienced significant changes in the first half of the rapid economic growth period. Some went into a decline, and some even discontinued. On the other hand, the festivals were revived and redeveloped in the second half of that period. The degeneration in the first half was attributed to the New Lifestyle Movement as well as the trend of the times to put the economy first. The revival in the second half was supported by the following factors emerging in the Age of Culture, when Japan was enjoying stable growth after the oil shocks: (i) "enculturation" to recognize festivals as important culture and designate them as cultural assets; (ii) "touristization" to use festivals as tourism resources; (iii) "organization" to let local authorities operate festivals and bear the cost; and (iv) "safety improvement" to make festivals accident-free.

Key words: Rapid growth, degeneration and revival of festivals, enculturation of festivals